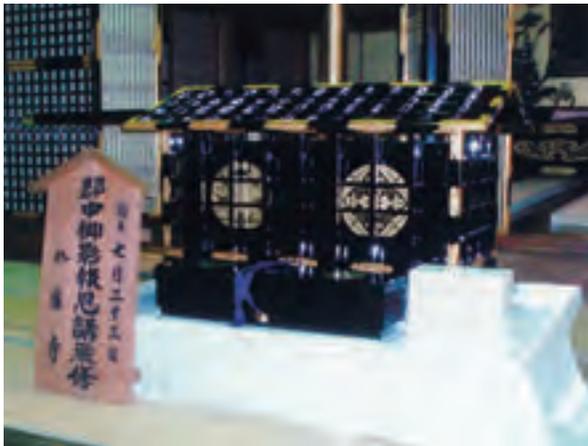


郡中御影報恩講

一〇年におよぶ石山合戦とその終結以来、教如上人への支援を怠らなかつた能美郡四日講中に対し、いまだ不安定な隠居の身であった上人より、文禄四年（一五九五）八月二十日に本願



勸婦寺の本堂に安置された郡中御影を納める輿(小松市東町)

寺前住頭如上人真影、同年

十月十九日に親鸞聖人御影が授与された。

いつしかこれを「郡中御影」と称するようになった。

四日講はやがて、小松町と能美郡二二

〇余か村連合の二十五日講として結ばれ、東本願寺常如上人や一如上人より御消息も下されている。そしてこの頃より、郡中御影を奉じて村々を回村して報恩講が勤められたようである。

以来連綿と郡中の門徒衆により護持



本堂奉懸 郡中御影

されて来たが、現在では勸婦寺に保管され、小松六か寺(勸婦寺・勝光寺・本覚寺・稱名寺・本蓮寺・本光寺)が回り持ちで会場となり毎年七月二十三日に勤修され、俗に「なすびの報恩講」として親しまれる。



道中行列風景

筆者が参列した平成二十一年(二〇一九)年は、親鸞聖人七五〇回御遠忌(ごえんき)お待ち受け法要も兼修され、行列に稚児(ご)も加わり賑々しいものであった。勸帰寺において朝七時の晨朝(じんちよう)の後暫くして、白い肩衣(かたさぬ)を着用した二〇余名の世話役により幟旗(しほ)を先頭に、「カゴ」と呼ばれる定紋入り黒塗の輿(こし)が担がれ、駅前(駅前)の信号を経由し再びこの年の会場の勸帰寺へ入った。御影様(ごかげさま)のお通りを告げる声が町内に響いた。

輿の到着後、一〇時より法要が始まり引き続き御消息が拝読され、お堂を埋めた



道中行列が報恩講の会場である勸帰寺に到着

参詣者のお念仏の声が四〇〇余年の時を超えた。ここに集う旧能美郡の門徒衆は、現在は板津組・小松組・苗代組・粟津組・徳橋組・北板津組・九日講組・十日講組の八か組で組織され、幾千の門徒の血肉となって深く根付き、受け継がれている。

(青木 馨)